都留市史

通史編

第三節　花開く市域の縄文時代――先史文化の隆盛期

市内において発見されている遺跡は八〇か所余であるが、そのうち八〇パーセント以上が縄文時代の遺跡であり、縄文時代に多数の集団が居住し、縄文文化の繁栄期を迎えたことを示している。遺跡はいずれも桂川およびその支流河岸段丘上に存在し、大幡川流域に一五か所、菅野川・戸沢川流域に一四か所、鹿留川・柄杓流川流域に七か所、朝日川流域に七か所、高川流域に八か所、桂川流域に一五か所となっている。

また、時期的には、草創期二か所（？）、早期一一か所、前期二七か所、中期四六か所、後期二一か所、晩期七か所で、圧倒的に中期が多く半数以上となっており、次いで前期、早・後期で、晩期になると急激に減少している。こうした状況は、日本列島の縄文時代における様相と同一である。すなわち、草創期に始まり、中期にその全盛期があり、後・晩期に衰退化していくという現象を示しているのである。この現象は同時に人口そのものの増減をも示していると考えられる。

草創期（紀元前一〇、〇〇〇～八、〇〇〇年）

市域における草創期の遺跡は「有舌尖頭器」の出土を伝える久保遺跡や山ノ神遺跡など数か所で存在の可能性がみとめられる。

草創期は、「無文土器」、「沈線文土器」、「隆線文土器」、「豆粒文土器」、「爪形文土器」など、最古の土器群が出現した時期であるが、従来これらに伴う石器群は新来の石鏃を除くと縄文時代とは異なる槍先形尖頭器、有舌尖頭器、打製片刃石斧、掻器、細石器など先縄文時代（旧石器時代）から継続しているものである。しかも、草

早期の土器自体日本列島周辺の先史土器と類似したもので、必ずしも列島特有の縄文土器とすることはできないと思われる。このような点から、さらに石器という生産利器を重視する観点から草創期の文化は旧石器時代晩期の文化、あるいは縄文時代の前段階の文化に属するという考え方もある。

いずれにしても市域において、草創期の遺跡が数か所存在する可能性があり、今後当該期の文化内容について明らかにされていくものと思われる。

早期（紀元前八、〇〇〇～五、〇〇〇年）

市内における早期の遺跡では前半期に「撚糸文土器」、「押型文土器」、後半期に「貝殻条痕文土器」（土器の器壁の中に植物の繊維を混入させている点に特徴がある）が出土する。特に押型文土器の出土が多い点は中部地方、特に信濃地域との関係の強さを示しているものと思われる。早期後半期になると太平洋沿岸地域に盛行した貝殻条痕文土器にとって替えられる点に特色を有する。海産の貝の交易によるものか、貝殻条痕文土器自体の搬入によるものか、いずれにしても太平洋沿岸地帯との交易の存在が考えられよう。

四日市場の生出山山頂遺跡では、居住生活を示す長軸四、三メートルの不整方形プランの竪穴住居跡が発見されているが、押型文土器が出土しているので現状では最古の住居跡とみられる。また、この住居跡から狩猟用の石鏃、解体、調理用の掻器や石皿、磨石も出土している。

田原の山ノ神遺跡では早期前半の撚糸文土器、同後半の貝殻条痕文土器が出土しており、関東地方の太平洋沿岸地域との交流をうかがわせる。

なお、夏狩の山梨原遺跡では、復元可能な貝殻条痕文土器が出土している。

前期（紀元前五、〇〇〇～三、〇〇〇年）

この時期は、完新世の日本列島において最も温暖化した時期であり、海水面の上昇により内陸部に海進がひき起された。例えば当該期の関東地方において海水性の貝塚が栃木県藤岡町にまで存在するところから、その付近まで海進があったことが推定されている。これを「縄文海進」と呼んでいる。いわば海と山とが近づいたのであり、各々との交流が活発化し、海の漁撈文化の影響が内陸部にも伝わっていったと考えられる。太平洋沿岸側では千葉県松戸市幸田貝塚のように広大な貝塚が形成され、定着的な集落が形成されたのもこの時期である。

市内において早期から前期にかけての遺跡数は増大するが、前半期の「関山式土器」・「黒浜式土器」（両者とも早期後半より継続して器壁内に植物繊維を混入させている。また、器面に撚紐を回転させて「縄文」を施しており、真正な「縄文土器」の登場である）を出土する遺跡は四か所ほどで、他は後半期の「諸磯式土器」（前半期の土器の「縄文」の中に用いられた半截した管による文様を主として描いた点が特徴である）を出土する遺跡で約一八か所にものぼり、前期の遺跡の約三分の二を占めている。諸磯式土器は関東地方の南半部から山梨県にかけて分布圏を形成しているが、山梨県内にやや多くみられる点が注目される。

大幡の久保地遺跡では関山式期の竪穴住居跡一軒、夏狩の山梨原遺跡においては諸磯文化期の竪穴住居跡一軒で計二軒が発見されている。いずれも円形プランを呈しており、約三・七×三・三メートルと直結三・五メートルとほぼ同一の規模をもっている。これらの住居跡からは諸磯式土器を除いては出土品はなく、その生活内容を知り得る資料に乏しい。

また、田原の山ノ神遺跡においても諸磯期の土壙四基が発見されている。そのうちの一つの土壙上面より抉状耳飾が出土しており、墓の副葬品と推定されている。したがって、「土壙」は人骨の発見こそ確認されていない

が、大部分墓穴としての可能性が高いのである。

当該期の土壙は五基発見され、それらに打製石斧、磨石、砥石などの石器が伴っており、すでに縄文時代中期の石器群と同様であることが知られる。なお、上戸沢の西畑遺跡では大量に「諸磯式土器」が出土している。

小形山の大日影遺跡では、前期末に属する「十三菩提式土器」（縄文地に結節隆線文やソーメン状の貼付文を施している）を出土した竪穴住居跡一軒が発見されている。約四・一×四・三メートルの円形プランを呈し、中央に炉跡が位置している。住居跡の床面上から深鉢や打製石斧が出土している。当該期の遺跡自体が減少する傾向の中にあって本住居跡の発見は貴重である。

中期（紀元前三、〇〇〇～二、〇〇〇年）

当該期には日本列島全体に海浜部・内陸部を問わず飛躍的に遺跡の数が増大し、しかも大規模な集落や貝塚が作られ、縄文文化の隆盛期ということができる。当然、その背景には食料資源の豊かさとその獲得技術の発達という点が考えられる。かつて、当該期における縄文農耕説が唱えられたように、植物性食料への依存率を高めたことも推定される。

また、当該期においては関東地方と中部地方の土器が双方影響し合って各々ともに大形の豪華な土器が作られていく。もっとも縄文土器らしい隆帯文や各種貼付文等による繁縟な文様で飾られるようになり、世界の先史時代においても稀に見る縄文土器としてその特色をいかんなく発揮している。やはり活発な生産活動と安定した生活を基盤として成立した土器文化であろう。関東地方側の「五領ヶ台式土器」、「勝坂式土器」、「加曽利E式土器」、中部地方側の「新道式土器」、「藤内式土器」、「井戸尻式土器」、「曽利式土器」などと呼ばれる土器群によって彩られている。

市内において発見されている遺跡の大部分は当該期であることは先述したが、発掘調査の実施された遺跡では

多数の竪穴住居跡が発見されており、大規模な集落を形成していたことが判明している。

大幡の久保地遺跡では中期初頭の五領ヶ台式期の竪穴住居跡六軒が発見されている。そのうちの一軒は七・一×五・五メートルの楕円形プランを呈し、やや西寄りに土器を埋設した「埋甕炉」をもっている。住居跡内からは土掘り具である多量の打製石斧の他に磨石、凹石、石匙、石鏃など当該期の基本的な石器群が出土している。

小形山の中溝遺跡では中期前半頃の新道式期・藤内I式の住居跡が六軒発見されているが、いずれも径約四・五メートル前後の円形プランに替っており、中央には周囲を石で囲んだ「石囲い炉」が設けられている。また、床面に「埋甕」をもつ住居跡もみられる。この「埋甕」は中部地方、および関東地方にみられる乳幼児の墓とする説と、乳児の胎盤処理に用いられたとする二説がある。住居跡内からやはり多量の打製石斧が出土している点が特徴的で、他に磨製石斧、石匙、石皿、磨石、石鏃などが出土しており、中期の石器群の組合せとして定着している状況がうかがえる。当該期の住居跡は久保地遺跡、山梨原遺跡で各一軒ずつ発見されている。

もっとも隆盛した時期の中期中頃から後半にかけては、久保地遺跡で井戸尻式期の住居跡四軒、法能の住吉遺跡や久保地遺跡で曽利式期の住居跡が、前者では二軒であるが後者では二二軒と多数発見されている。井戸尻式期では円形プランで大型の石囲い炉、石棒を出土、曽利式期では楕円形プランを呈し、大型長方形の石囲い炉を設けるものと、円形プランで方形状の石囲い炉を設けるものとがあるが、いずれも床面に埋甕のみられるものがある。なお、埋甕は乳幼児の埋葬とみられることが報告されている。また、住居跡内の堆積土に富士山の火山灰であるスコリアが認められ、当該期に火山災害に遭遇したことも推測されている。

中期末頃になると住居跡の発見は激減し、小形山の中谷遺跡では、加曽利E4式期の特殊な敷石住居跡と目されるもの一軒のみと集落の退嬰化している現象がうかがえる。敷石住居は中部地方、および関東地方西・南部に

みられ、床に河原石を敷きつめた居住には適さない特殊な住居である。しかし、厚原の牛石遺跡で
メートルに及ぶ大環状列石遺構（ストーン・サークル）および各種の配石遺構が発見されており、次代の後期に盛行する各種配石遺構の文化に継続していくものと思われる。

これらの配石遺構は屋外祭祀場として信仰による祭儀を行なった結果として構築されていったものと考えられるが、その実態についてはいまだ不明な点が多い。

また、中谷遺跡においては、曽利式期の配石遺構に伴う土壙内から頭骨、肩胛骨、上腕骨、肋骨などの人骨が発見されているが、十一歳前後の小児骨と判定されている。同地点から他に壮年期の女性骨、三歳前後の乳児骨が検出され、配石遺構が埋葬と関連することも明らかとなったのである。

後期（紀元前二、〇〇〇～一、〇〇〇年）

縄文時代中期末頃から気候の寒冷化が促進していったためであろうか、これまでの隆盛をきわめた中期文化から後退していく現象がみられ、住居跡の激減するかわりに配石遺構など信仰に関わるとみられる特殊な遺構が作られるようになった。中部・関東地方だけでなく日本列島全体にみられる現象である。おそらく人口の減少という大きな変化を現わしているものと考えられる。

朝日馬場の尾咲原（おさきはら）遺跡では後期初頭の堀之内式期の敷石住居跡が三軒発見されているが、各々石囲い炉を設けている。

次の加曽利B式期になると、住居跡は中谷遺跡で四軒、尾咲原遺跡で五軒発見されている。中谷遺跡の住居跡のうち一軒は約四・五メートル弱の方形プランを呈するもので、当該期に円形から方形のプランへと移行したことがうかがえる。

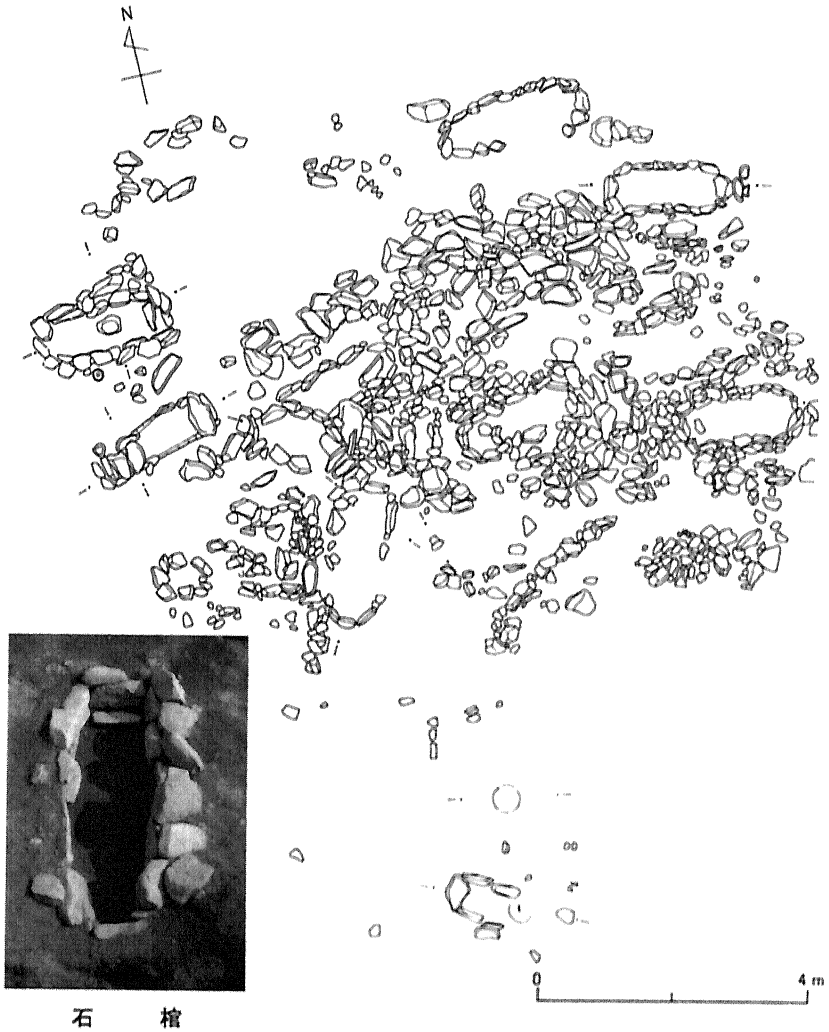

図1-2　尾崎原遺跡　第2地点発見の石棺状配石遺構縄文時代後・晩期全体図

尾咲原遺跡の第2地点では、環状に巡る配石遺構があり、その南側の配石下から石棺墓と考えられる組合式石棺状遺構が発見されている。第1地点の住居跡群を形成する居住・生活地区と埋葬地区（共同墓地）とが近接していながら意識的に分離されたものと考えられる。

なお、後期の中頃になると関東地方の影響を受けてこれまでの縄文土器と比べて大きな変化が起った。中期の土器は大形で繁縟な文様で飾られたものであったが、後期では小形化し、しかも色々な器形のものが作られるようになった。注口土器や皿、台付鉢などが新たに登場し、文様も「磨消縄文」による平板化したものに変ったのである。さらに精製土器とおそらく煮沸用の粗製土器とに分離した点に大きな特色をもつ。したがって器形の相違は機能の異なる器種ということになる。このような状況は晩期の土器に引き継がれ、その頂点を迎えるのである。また当該期に呪術・信仰・祭祀に関わるものとみられる土偶作りが盛行するが、市域の遺跡においてはまだ発見されていない（山梨県内では勝沼町釈迦堂遺跡のように、すでに中期に大量に出土した遺跡がある）。

技術の発達にもかかわらず生活環境の条件が低下していった時期と考えられる。

晩期（紀元前一、〇〇〇～四〇〇年）

後期における気候の変化、それに伴う生活様式の変化は縄文時代の終末である晩期にも進行していったものと考えられる。晩期の文化も後期文化の延長線上にあるとみられる。東北地方においては亀ヶ岡文化としての繁栄をほこっているが、関東地方の海浜地帯を除く関東・中部地方の山岳地帯及びその周辺地帯においては遺跡も少なく、大規模な集落はみられない。

しかしながら、工芸技術の発達は頂点を迎え、特に晩期の縄文土器の精製土器は、東日本一帯に「亀ヶ岡式土器」（洗練された磨消縄文による種々の雲形文等幾何学文を駆使したものが中心）の影響を受け、優れた造形品

として縄文土器の最高峰に立つものとなったのである。

山梨県内においても亀ヶ岡式土器の影響を受けた精製土器、あるいは信濃の「佐野式土器」、さらに関東地方の海浜地帯に分布する「安行式土器」の影響を受けたものとが存在するが、基本的には静岡県地方の「清水天王山式土器」が盛行している地域である。

市内における晩期の遺跡は、中谷遺跡、宮脇遺跡、尾咲原遺跡などが存在する。中谷遺跡では清水天王山式期の住居跡が二軒発見され、一辺約三・五メートル前後の方形プランを呈している。同遺跡の配石遺構からは祭祀用と考えられる「土版」や土偶が出土しているが、特に土偶は清水天王山式に属するもので、当該期の土製耳飾を着けた状態を表わしたものとして著名である。

尾咲原遺跡においても清水天王山式期の住居跡六軒が発見されているが、このうち一軒は一辺約六メートルの方形プランを呈するもので、方形状の石囲い炉を設け、壁際に二〇～四〇センチ大の河原石を巡らし、敷石住居的な様相をみせている。住居跡内からは土偶、土製耳飾、土版などの土製品、石棒や石剣など祭祀や呪術に関わる遺物が出土しており、呪術的な社会の存在を示している。

また、住居跡の他に組合式石棺状の遺構があるが、これは「石棺墓」と考えられる。石棺墓は西日本の弥生時代に普及する墓制であるが、すでに縄文時代後期の関東地方や東北地方に出現している。

以上の晩期の遺跡、遺構はその前半期のものであり、その後に続くと思われる安行式土器は出土しているが、その後半期の文化については不明である。弥生時代に継続していく文化の存在は今後の調査にまたなければならない。